

どうぞうじゅういちめんかんのんかけぼとけ
銅造十一面観音懸仏

| | |
|-------|--------------|
| 種 別 | 小松市指定文化財 工芸品 |
| 指定年月日 | 昭和62年11月3日 |
| 所 在 地 | 小松市立博物館（寄託） |

本件は粟津町白山神社に祀られる仏像である。粟津町白山神社の創祀は古く、『源平盛衰記』にも記述がみられ、平安時代から白山信仰の主要神社であった。白山社の主祭神である白山妙理大権現の本地仏⁽¹⁾が十一面観音であることから、この像は神社の御神体であったと推定される。

もとは鏡板に取り付けられた懸仏⁽²⁾であり、背面の取り付け用の小穴からそのことが覗える。現在は厨子の中に納められており、厨子の銘文には文化元年（1804）に厨子が新調されたと記されている。また銘文の末尾には信心惣代として28か村の村名と肝煎の名が記され、郷内の各村の人々から信仰を受けてきたことが分かる。仏像の製作年代は鎌倉時代初期とみられ、像容、鑄上がりともに優れたものである。

明治初期の廃仏毀釈⁽³⁾の流れの中で、当地方でも多くの仏像が破壊・破棄された。その中で本件は現代までよく守られたもので、仏教美術の上でも、白山信仰の遺品としても価値の高いものである。

- (1) 本地仏：日本の神々は様々な仏が化身したものであるとする「本地垂迹説」において、その神の正体と考えられた仏のこと。
- (2) 懸仏：銅などの円盤に仏の鑄像を付けたもの。柱や壁に懸けて礼拝した。
- (3) 廃仏毀釈：明治政府の神仏分離政策が発端となって起こった仏教弾圧運動。これによって多くの寺院や仏像が破壊された。



厨子



十一面観音懸仏